

3 レタスのナモグリバエに対する有効薬剤と処理方法

ねらいと成果

近年、淡路の主要野菜であるレタスにナモグリバエが多発し、生産上の阻害要因となっている。

ナモグリバエは葉に成虫による吸汁痕や幼虫による食入痕を生じ、多発すると結球葉にまで食入痕が認められるようになり、出荷に際して商品価値が低下する。被害は育苗期から生育期全般にかけて認められるため、播種時培土混和、定植時、生育期処理における各種薬剤の防除効果について検討した結果、有効薬剤が明らかとなった。

内容

1 試験方法

供試したレタスの品種は「アモーレ」で試験実施時のナモグリバエの発生量は中程度であった。

(1) 播種時培土混和处理：2004年4月21日、表1に示す薬剤の所定量を培土と混和し、200穴セルトレイに充填後、播種して側窓を開放した温室に置いた。処理18日後に200株の全葉について成虫被害（吸汁痕数）と幼虫被害（食入痕数）を調査した。

(2) 定植時処理：2004年4月20日、表2に示す薬剤の所定量を定植直前の200穴セルトレイに粒剤は手撒きし、マイクロカプセル剤と顆粒水溶剤は如露により散布後、定植した。処理29日後に30株の全葉について幼虫被害を調査した。

(3) 生育期処理；2004年4月21日に定植したレタスに5月9日、肩掛け式手動噴霧器を用いて表3に示す薬剤150L/10a散布し、処理12日後に30株全葉について幼虫被害を調査した。

表1 播種時培土混和の効果

薬剤名	処理量 /培土1L	吸汁 痕数	食入 痕数
ジノテフラン粒剤	15g	16(6.2)	0(0.0)
ジノテフラン粒剤	30g	0(0.0)	0(0.0)
チアメトキサム粒剤	15g	0(0.0)	0(0.0)
チアメトキサム粒剤	30g	0(0.0)	1(0.5)
ニテンピラム粒剤	10g	30(11.5)	2(1.0)
クロチアエジソン粒剤	10g	45(17.3)	0(0.0)
無処理	—	260(100)	195(100)

数値は200株当たり。()内は無処理比(%)

2 試験結果

(1) 播種時培土混和处理：成虫、幼虫の被害とともに抑えたのはジノテフラン粒剤30gとチアメトキサム粒剤15g、30gであった(表1)。

(2) 定植時処理；供試5薬剤の中で高い効果が認められた薬剤はジノテフラン水溶剤50倍0.5L/セルトレイとベンフラカルブマイクロカプセル100倍0.5L/セルトレイであった(表2)。

(3) 生育期処理：トルフェンピラド乳剤1000倍の効果が非常に高く、ついでピリダリル水和剤1000倍の効果が優れていた(表3)。

普及場の留意点

上記薬剤のうち、ジノテフラン粒剤、ジノテフラン水溶剤、トルフェンピラド乳剤、ピリダリル水和剤はレタスのナモグリバエに対し未登録であるため、今後登録拡大が必要である。なお、チアメトキサム粒剤は培土1L当たり15gの使用量のみ登録がある。

廣瀬 敏晴（淡路農技・農業部）

表2 定植時処理の効果

薬剤名	希釈倍数	処理量	食入痕数/株
アセタミプリト粒剤	—	0.5g/株	1.18(11.1)
チアメトキサム粒剤	—	0.5g/株	0.73(6.9)
ニテンピラム粒剤	—	1g/株	0.87(8.6)
ベンフラカルブMC剤	100倍	0.5L/セルトレイ	0.23(2.2)
ジノテフラン水溶剤	50倍	0.5L/セルトレイ	0.11(1.2)
無処理	—	—	10.63(100)

MC：マイクロカプセル。()内は無処理比(%)

表3 生育期処理の効果

薬剤名	希釈倍数	食入痕数/株
チアメトキサム水溶剤	2000	0.53(11.4)
フルフェノキサロン乳剤	4000	0.77(16.6)
クロチアエジソン水溶剤	2000	0.63(13.6)
カルタップ水溶剤	1500	0.6(13.0)
ピリダリル水和剤	1000	0.37(8.0)
トルフェンピラド乳剤	1000	0(0.0)
ジノテフラン水溶剤	2000	0.47(10.2)
エマメクチン安息香酸塩乳剤	2000	0.43(9.3)
無処理	—	4.63(100)

()内は無処理比(%)